子ども未来学研究　2021 年　第 16 号　pp.9-18

学生と障害者が CMC で共感を紡ぐとりくみ：実践報告

―― 非接触における共感のあり方に関する一考察

松　本　真理子

要　旨

真の学びや理解には直接のふれあいが必須である。二年以上にわたるパンデミックにより、CMC が教育や就労の場において日常的なコミュニケーション手段となった。これまで、他者との理解や交流の手段としてセカンドベストとしての位置づけにあったCMC であるが、今後障害者が尊厳をもって社会とつながるツールとしての可能性を秘めている。ゼミ生と社会福祉施設における利用者と行った三年間にわたる PBL 活動を振り返り、CMC がこれからの共生時代において障害者の生活を拡げる可能性について、具体的エピソードを通して論じる。

キーワード：CMC　障害者　共感　身体性　非接触　コロナ感染症　PBL

はじめに～問題提起

子どもや障害者をはじめとする人と関わる教育や支援活動が、対面 Face to Face（以下 FTF とする）で行われることがもっとも望ましいことは議論の余地がない。それは、子どもや相談者、障害児・者と心理臨床の現場で関わってきた筆者にとっても、ゆるぎのない実感であり、多くの専門家が肯定するところである。

2019 年度から筆者の勤務する大学で始まった PBL 型ゼミでは、2020 年度から新型コロナ感染症の流行に伴い、最初から最後まで非接触、すなわち Computer-Mediated Communication（以下 CMC とする）で活動が行われることになった。CMC、すなわちコンピューター媒介コミュニケーションとは、2 台以上の電子機器（コンピューター）を介して行われる人間のコミュニケーションのことである。

障害者や認知症の方々とともに目標や価値観を共有し、ともに活動を行うことは、保育・教職を目指す学生にとって大きな学びが期待される。それを徹頭徹尾、非接触の CMC で行うということを、筆者は当初衝撃をもって受け止めた。「学生が障害者と関わることの本来的な意義に、CMC のみで本当に到達できるのだろうか」「本質的なことは何もできないのではないか。形式だけの内実の伴わない活動になるのではないか」といったことが懸念された。障害者や高齢者との交流は、FTF、直接のふれあいこそが真の学びの形であり、CMC は FTF のセカンドベストな手段であると考えていたからである。CMC による交流は、FTF で本来得られる学びの、何割

か減じられた形になるのでは。筆者は、PBL ゼミ開始 3 年目の途中までそう考えていた。

しかし、活動する学生の姿や障害当事者からの反応、また、これからの共生社会のあり方を考えた時、これまでの常識を脇に置いて、現在の社会的文脈の中に置いて CMC の本質を問い直す必要があると考えた。本稿では、CMC を障害者との交流に活用した実践報告から「CMC がもたらす共感の新しい局面」という観点で考察したい。

社会福祉法人暁会フェニックスとのPBL

PBL とは、Project Based Learning の略で、課題解決型学習のことである。変化が早く、正解のみつけにくい現代社会のなかで、自ら課題解決に向かい、多様な価値観のなかで共生していくことのできる人材を育成するために、近年世界的に進められている学習形態である。これまでの座学による知識習得を重視する学習の形態とは異なり、学生自らが問題の背景を調べ、課題をみつけ、その解決に向け企画立案するというものである。そこには、学問分野にこだわらない柔軟な発想力、分析的思考や計画立案力、多様な意見に耳を傾けまとめあげるコミュニケーション力といったさまざまな能力が求められる。

山口県では、企業・行政と学校が連携し、社会で課題解決に向かうことのできる人材育成に向け PBL 型教育プログラムが展開されることになった。筆者の勤務する大学では、2019 年度から、地域の企業の協力を得て PBL 学習が開始された。

筆者が担当するゼミには、毎年、3 年生 14 ～ 5 名が集まる。学生は全員、保育者および小学校教員養成を旨とする学科・専攻に所属している。ゼミ学生をさらに 3 チームに分け、1 チームを 4 ～ 5 名で構成した。各チームは、パートナーとなる事業所から課される課題からテーマを設定し、活動を行った。

初年度の 2019 年度は下関市にある病院食の調理・提供を行う有限会社ナックと提携させていただき、3 チームのうち 1 チームは関連法人である社会福祉法人暁会とも活動をさせていただいた。2020 年度、2021 年度は社会福祉法人暁会フェニックスとの提携に移行し、同法人の三事業所と活動を行った。

以下に、各年度の提携事業所、プロジェクトの内容を示す。（**表 1**）

表 1　社会福祉法人暁会 PBL の活動実践一覧

	2021 年度（遠隔）	2020 年度（遠隔）	2019 年度（対面）
プロジェクト 1	「Five Senses - 五感を楽しむ製作と地域とのつながりを作る展示・販売」	共通テーマ：「つながる楽しさと輝く笑顔～今私たちにできること」 「作って遊ぶボウリング」	「未来につなぐ幼老ケア」
提携事業所	生活介護事業所フェニックス	児童デイサービスセンターフェニックス	児童デイサービスセンターフェニックス、特別養護老人ホームフェニックス

プロジェクト 2	「一人ひとりが輝ける場を－季節感や外出気分を味わうプラネタリウム・移動販売・オミビスタ」	共通テーマ：「つながる楽しさと輝く笑顔～今私たちにできること」 「絵を使った交流会と絵本の共同製作」	「セントラルキッチン宣伝プロジェクト」
提携事業所	障害者支援施設フェニックス	障害者支援施設フェニックス	有限会社ナック
プロジェクト 3	「いっしょに作る手袋シアター『桃太郎』、焼き芋詰め合わせ、くるくる絵柄合わせ」	共通テーマ：「つながる楽しさと輝く笑顔～今私たちにできること」 「クイズと歌の交流会、しおりとコースターの共同制作」	「昭和病院食堂への新規サービス提案」
提携事業所	グループホームフェニックスの里	グループホームフェニックスの里	有限会社ナック、社会福祉法人茜会昭和病院

表 2　学生が提携した事業所における利用者の概要　※年度により若干の変動あり

生活介護事業所	通所．利用人数は曜日により異なる．
児童デイサービスセンターフェニックス	就学前の児童．通所．
障害者支援施設フェニックス	30 代～ 70 代の成人．入所施設（定員 42 名）
グループホームフェニックスの里	高齢者．認知症の診断あり．入所（9 名）

利用者はさまざまな障害種の方がおられ、重複障害の方も少なくない。(**表 2**)

いずれの活動も、事業所側から課題を与えられ、それに対して学生が背景を調べて理解し、解決のための企画を一年間かけて考え実施する。従来のゼミナールと異なるのは、指導教員が自身の専門性から助言・解答を学生に与えることをしない点である。あくまで学生自身が自分たちなりの解決方法を導き出すためのサポートを行う。実際、内容面で指示したことはなく、むしろ、メール文の校正、段取りの立て方、予算管理の方法、チーム内の対人関係の取り方といった、社会人として必要な事柄を助言したことの方がはるかに多い。

共感の源泉としての身体感覚

「たいへんだなあ」と思わず漏れる共感は、大抵、共感者自身の体験がもととなっている。技術が発達するまでの数万年、食料を獲ったり収穫することには多くの労力を要した。移動も労働も、人々にとっては同等の負担であった。隣の集落まで、私にとって徒歩でほぼ 1 時間かかるとすれば、他の人にとってもほぼ同等の時間と労力を要した。「私がここまで来るのがこんなに大変だったんだから、ここに来たあなたも同じようにたいへんだったでしょう」という感慨には、互いに共通の身体感覚が裏打ちされている。「ご苦労様」「痛み分け」「お互い様」といった言葉は、こうした身体感覚を伴う共通の体験から生まれた言葉であると考えられる。

Commu- という接頭辞は「共通の」という意味を持ち、共通の感覚をわかちあうことがコミュニケーションの原義である。『心理臨床大辞典』によると、心理臨床で援助機能として使われる「共感」とは、体験的な理解のことを意味する。すなわち、「共感」は本来、経験的・身体感覚を伴う体験がベースになり、「コミュニケーション」とはその感覚をわかちあうことを示したのである。

こうしたことをふまえ、筆者は対人援助技術の講義で、初歩的知識として「共感とは何か」を教える際、「自転車で転んで弁慶の泣きどころを打った」という話を友人から聞いたらあなたはどんな気持ちになる？」、あるいは、「レモンを食べた話を友達から聞いたらどうなる？」といった例をよく使う。学生は、そう聞いただけで「痛い」「酸っぱい」といった表情を示す。いずれもレスポンデント条件付けによる生理的反応で、多くの人が過去の経験から共通の感覚を想起しやすい。共感のなかでも我々の多くが共通して持つ身体感覚は、誰にも理解しやすいものである。初歩的な共感は、身体感覚や経験から直結する感覚なのである。物理法則に依存したこれまでの社会においては、こうした身体感覚を基にした共感が前提となっていた。

もちろん、心理臨床における「共感」は身体感覚や経験に限定されたものではない。「まるであたかも自分が体験しているかのように」相手の体験・心情に想像を馳せることである。その結果、自身の心情も共振れすることで「共感的理解」が成立する。他者の経験に 100% 一致する経験をもつことは不可能であるから、最も近いであろう共通の体験や感覚を土台に、傾聴によって理解を深めていく。援助スキルとしての「共感」にはさらに先のステップが必要となる。

差異とインパクト

次のエピソードは、筆者が大学院生時代、教員から聞いたエピソードである。

＜エピソード１＞　学生の時、小頭症の子どもと初めて関わった日のこと。事前に勉強したことがすべて崩れ、自分の中に言いようのないさまざまな感情が湧いた。家に帰って泣いた。それを安易に命名しないことが研究の動機のひとつとなっている。

この教員に限らず、重度心身障害児・者と初めて出会った学生は、同様の感覚を体験しているのではないか。彼我の決定的な差異に打たれ、そこから理解の入り口に立つ。多くの場合、ともに過ごす時間を重ねることで、身体の差異を少しずつ超えていく。最後には「障害のある〜さん」ではなく、「〜さん」という一人の個性との付き合いになっていく。

従来、保育・教職の施設実習や援助職の職能訓練においては、施設の障害者と対面でともに過ごすことが必須である。対象を学び理解するには、実際に会うことが、机上学習に比べて問題にする余地がないほど重要だと考えられているからである。障害のある人と出会う際の衝撃のような感覚は、保育・教職・援助職にとっては、いわば通過儀礼のような、必ず通るステップである。それがあってこそ、概念や知識だけでない深い学びを得られるのだと。

障害児・者と実際に出会い、体験をともにし、そこから理解の糸を紡ぐことは、今回の PBL

活動においても必定のステップであると筆者は考えていた。実際、初年度である2019年度は、実際に学生が施設に赴き、子どもや利用者様と過ごしたり会話する機会を持つことを推奨した。そして実際、学生達は、机上で考えていたよりずっと難しい現実に直面し、そこを起点に企画を考えていったのである。

2020年明け頃からコロナ感染症が世界的な拡大を見せた。国内の多く福祉施設同様、社会福祉法人暁会フェニックスも、家族を含め、施設外の人が施設に立ち入ることができなくなった。体力の弱い高齢者や障害者は感染症に罹患すると重症化しやすい。当時はまだワクチンも出回っていなかった。こうした事情から、2020年度のゼミ生は、職員との打ち合わせから利用者との活動すべてをCMCで行うことを余儀なくされた。直接的なふれあいのない活動である。「ふれあうことなしに相手の何がわかるというのだ。」「どうやってやれというのだろう」。指導教員も、そんな問いに答えることができないまま、学生に「オールCMCで行う」ことを指示するしかなかった。

遠隔だけどリアル

遠隔で関係を紡ぎ、共通の目標や楽しい活動を共有する。福祉や教育を職業とする人でさえ、経験してこなかったことである。学生が実現するにはとうてい困難な離れ業と思われた。

エピソード2　差異のインパクトを受けなかった学生達

予想通り、学生は苦しんだ。そもそも、大学がすべて遠隔授業となるなか、ゼミ生と教員同士も対面で会うことができなかった。オンラインでのゼミ活動も、誰かの通信が途切れたり、資料を共有できなかったりと、通常の2倍3倍の時間を要した。たどり着きたい場所には一向にたどり着かない。目指す先に、みつけたいものが本当に実在するのかどうかも、誰にもわからない。

それでも、学生達は、焦りと無力感に抗いながらも、一度も会わない人とつながるにはどうすればよいのか、夏前にはそのための工夫点を挙げ、ようやく前に進み始めた。施設の職員にオンラインで現場と映像をつないでもらい、学生が考えた企画 ―クイズや描画、ゲーム ― を利用者とともに行うことになった。対象となる方々について事前に調査し学んだが、「すべてを真にはわかっているわけではない」と自分たちでも感じていたようだ。

ゼミ生達は、苦難の末に最終的にはなんとかオールCMCでゲームやクイズを終えることができた。利用者のまっすぐな喜びの反応から、自分たちが目標とする「笑顔」「つながる」を達成することができた、と受け止めたようである。

エピソード1で挙げたような、差異インパクトは見受けられなかった。車椅子のご様子に、はっとさせられた場面もあったと思われるが、家に帰って泣くほどの衝撃ではなかったと考えられる。

筆者にはそのことの意味が当時は整理できないでいた。CMCでの活動が「実感の薄い交流」

であっても、意義として「浅い」とは決められないと感じた。「直接会うのがベストだが、仕方ないからCMCで行った。価値として劣るものである」と考えるべきかどうか、判然としなかった。

他方、学生達はそうではなかった。人と関わるのが好きで保育•教職を目指す学生たちである。会えなかったのはもちろん残念がっていたが、減じられた価値であるとは微塵も感じていないようだった。むしろ、彼らの日常的の一部となっていたSNS同様、起こったことそのものが100%の存在感をもち、身近なものと感じていたようだった。こうした、指導教員と学生の受け止めのギャップに気づいたところから、「やったことに意味がある」にとどまらない可能性があるのではないかと考えた。

CMCが日常の一部に

コロナ感染症が世界的に蔓延し、社会の中でさまざまな試みが模索された。在宅勤務を導入する企業が増え、小中高校でもオンライン授業の整備が進んだ。

2021年度のゼミ生は、ゼミ選択の段階から「オールCMC」での活動であることに納得して本ゼミに入ってきていた。学内では対面で授業を進めることができたこともあって、問題の入り口には比較的スムーズに立つことができた。この頃には学生も教員もオンライン授業にも慣れ、CMCに対する抵抗感は比較的少なくなっていた。苦労は少なくないわけではないが、オンライン授業にまつわるジョークを言えるようになるなど、追い詰められていた2020年に比べ、オンライン授業に対する心理的構えができてきていたように考える。

エピソード3　障害のリアリティがわからないから無茶を言う

2021年度ゼミ生の一チーム、LIFEチームは、フェニックスに通所してくる利用者と共にものづくりを行うことにした。利用者・職員さんとオンラインでやりとりを重ね、利用者を知ろうと一生懸命であったし、5人のメンバー中、2名は障害児施設、高齢者施設でアルバイトをしていたため、これらの学生がアイデア面で牽引したようであった。しかし、会ったことのない施設の方一人ひとりの作業風景をリアリティをもって脳内に再現できたかというと難しい様子であった。LIFEチームは「手形アート」を展示として、「エコバッグ」や「アロマオブジェクト」を共同製作して販売することにした。自分たちで製作したものを販売したいというニーズが利用者側にあったことと、コロナ感染症対策のため、利用者がこれまで以上に社会との接点がもちにくくなったこと、そのため地域とのつながりを作りたいというねらいがあったことからである。そこに、職員からの提案で「ウッドビーズ」も加わり、それぞれの製作工程をいくつかに分け、学生と利用者とで分担して製作を行った。

「エコバッグ」は、学生と利用者がアイデアを出し合ってデザインを作った。学生が消しゴムを彫ってはんこを作り、施設に届け、利用者がインクをつけ布地に押していくというものである。すぐにうまくいかないことが判明した。ハンコの持ち手がもちにくい、スタンプ台が小さすぎて

こまめに手を動かし角度を変えないとインクをつけられない、スタンプの持ち手がすぐとれる、布地がインクで汚れてしまう、といったことである。利用者の手の動きをそばで見ていない学生には「手が思い通りに動かない」というリアリティがわからなかったのである。

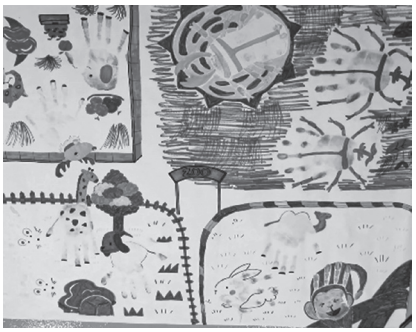

写真１　手形アート

写真２　販売風景

エピソード４　差異ショックがなくてもいいものができた

その試行錯誤の中から、ステンシルだと汚れないのではないか、というアイデアに行きつき、デザインや手作りの好きな学生たちがステンシル型を彫り、色とりどりにデザインされたエコバッグが完成した。大学内とよしみず病院内にある「A型就労支援事業所フェニックス」で販売したところ、製作した95枚のエコバッグ全てが売れた。多くの方がゼミ活動のねらいに賛同し、応援する気持ちから買って下さったと思うが、デザインを評価する声も聞こえてきた。

写真３　ステンシル

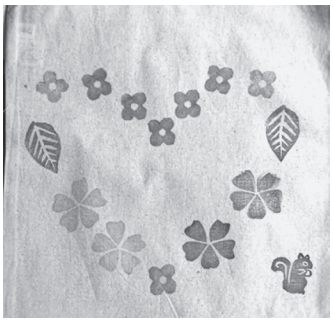

写真４　エコバッグ

写真５　エコバッグ

エピソード４の「はんこからステンシルへの転換」は、そばで障害者を見ていればすぐに気づくはずのアイデアであった。CMCにはそうしたデメリットがある。しかし、学生と障害者がいっしょに製作し販売の成功をおさめるために、FTFの差異ショックは必要なかった。目標の達成にただ喜び合っている二者（学生と障害者）がいた。（**表３**）

差異ショックは相手を理解する重要な道筋であることに変わりはないが、協働するうえでは唯一の道ではなかったのである。

表3　LIFEチーム結果報告会の感想（抜粋）　※下線　筆者

学生の感想	利用者の感想
・全ての商品が完売したことにより、安心と達成感を感じました。また、皆さんや職員さんとの繋がりができた気がして、嬉しく思います。1年間、本当にありがとうございました。 ・オンラインでしたが、皆さんと製作活動を一緒にできて楽しかったです。準備や製作を通して、もっと相手のことを考えて準備したり、行動したりすることの大切さを改めて知ることができました。商品が実際に使われているのを見ると、皆さんと一緒に頑張ってよかったと嬉しく思いました。本当にありがとうございました。 ・直接お会いすることはできませんでしたが、オンラインで一緒に活動できて楽しかったです。皆さんの笑顔や、皆さんと会話をしたことが、作業や販売への力になりました。また、皆さんの製作した商品を販売した際に、「可愛い」という声を多くいただきました。そんな素敵な商品を販売し、無事に完売することができて、とても良かったです。1年間ありがとうございました。 ・初めはLIFEチームのメンバーもあまり話したことのないメンバーで、更にオンラインでの活動で不安でしたが、皆で協力して無事活動を終えることができました。皆さんとも意見を交換しながら、一つの作品を作り上げたことへの達成感を感じることができました。 ・皆さんとお会いして一緒に製作活動をすることはできませんでしたが、オンラインで製作の内容を決めたり、製作の様子を見させていただいたりすることができてよかったです。販売期間内に全ての商品を完売することができ、達成感を味わうことができました。	・1年間関わってくれてありがとうございました。（職員さん:すごく楽しかったみたいです。） ・皆さんとオンラインで作品を作れてすごく良かったです。ありがとうございました。 ・1年間一緒に物が作れて楽しかったです。 ・また製作活動がしたいです。 ・面白い活動をありがとうございました。（職員さん：楽しかったそうです。） ・エコバッグの使い心地が気になります。学生の皆さん、コロナに気を付けてください。 （職員様のコメント） ・PBLでしたことをもとに、普段の余暇活動でもしてみたいことを挙げてくれるようになりました。 ・自分でできることに取り組まれた方、今までしたことがないけれど、してみたいことを見つけて取り組むことができた方など、皆が協力して楽しく活動に参加できていたと思います。ありがとうございました。 ・PBL活動をとても楽しみにされていた。特にオンライン交流は楽しみにされており、ある日は大変喜ばれ、ない日はとても残念がられていた。 ・物作り〜販売まで携われない部分もあったが、自分たちが考案し、作ったものが販売されるという過程が利用者様にはとても良い経験となり、大きな喜びにつながったのではないかと思う。

障害者が社会とつながるためのCMC

特別支援教育においても同様の議論がなされている。青木（2020）は、コロナ感染症第一波真っ最中の対談の中で「これまで（コロナ以前）は、知的障害のお子さんの支援は、本質的には遠隔と相性が良いと思っていなかった。特別支援学校では、子どもが自分から動けるような環境と教材を（対面で提示することを）大切にしてきた。今も（遠隔が）ベストだとは思っていない。」としながらも、対面ですべてを賄おうとする発想には、一つひとつの行動を教師の言語指導、すなわち「つきそい指導」に陥る危険性があることを指摘する。「言えばできる」は、裏を返せば「人からの指示がないとできない子」ということであり、そういう子どもにしてしまっているのではないかという。オンライン授業では離れていても視覚的に見せられる点や家庭でも応用させて展開できる点にメリットがあるとする。

中邑（2020）は、障害のある子どもは、インクルーシブと言いながら、就労する際の出口は決まっていることが多いと言う。日本の特別支援教育は学校で指示されればできるけれど、社会の

中で自ら考えて動くことには対応できておらず、学校の中だけで完結しがちになっている危惧を指摘する。学校で指導したことを家庭や社会に拡げていくために、多様な情報技術を今後積極的に活用するべきであると指摘している。

対面での教育や直接会うことの意味にこだわりすぎると、障害者を閉じ込めてしまうことにつながる。むしろ、身体や能力の差異が縮めやすいCMCを活用することで、障害者自身の自由な表現や活動、尊厳や自立した生活を拡大させることができる。ゼミ生達の行った取り組みは、（彼ら自身はそうとは意識せずに）そのような提案になっていたと考える。

情報技術と新しい共感のかたち

CMCは、FTFに比べ、自己表現や自己開示が容易になることがわかっている。佐藤（2006）によると、インターネットでのCMCは、FTFに比べ、自己開示量が増加するだけでなく、より内面的な自己開示を行いやすく、質的に深まる傾向があると言う。この事実には、匿名性も関係するが、筆者がエピソード１で挙げた「差異ショック」のような身体性の希薄さも寄与しているのではないかと考える。

CMCはなにより、情報が少ないぶん、互いにより「つながろう」とする。2020年度は特に、オンラインでゼミ生同士、ゼミ生と利用者が、必死でつながろうとしていた。その営み自体が関係希求的である。

SNSの発達によって、ハッシュタグのもとに、ふだんの生活条件に関わらず、共通の話題や共通の趣味、関心事で集まりやすくなった。CMCには、差異にとらわれることなく、他者同士が「共通点」でつながりやすい利点がある。物理的条件や身体的な差異に左右されない関係希求は、新たな共感のかたちということができるのではないか。「共感」の古典的な定義には身体感覚が必須であったが、CMCは、身体感覚を伴わないcommu-（共通の）交流の場での新しい共感のかたちを提案していると考えられる。それは障害者の自発的な自己表現と、社会との交流・共感のツールとなり、共生社会を実現する重要な要素となることが期待される。

【文献】

中邑賢龍（2019）基調講演 知的障害のある人の支援の未来：ICT技術の進化や情報インフラの整備等が知的障害のある人の支援に及ぼす可能性（特集 第56回全国知的障害福祉関係職員研究大会 山口大会）―（全体会：行政説明・基調講演）さぽーと：知的障害福祉研究 66(2)，10-12, 2019-02

中邑賢龍・青木高光（2020）知的障害のある子どもとのオンラインコミュニケーション．2020年5月27日対談「COVID-19（新型コロナウィルス）と特別支援教育～これからのオンライン教育を考える～」https://www.youtube.com/watch?v=klymb9Qap4k&list=LL&index=4 （最終閲覧2022年1月27日）

佐藤広英・吉田富二雄（2006）インターネット上における自己開示(1)．日本心理学会第70回大会論文集

高橋佳子・深田博巳（2006）CMCにおける自己開示の生起過程に関する研究．広島大学心理学研究(6)，87-101

氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕 編著（1992）共感.『心理臨床大辞典』培風館.
結城俊哉（2021）ケアにおける「手」の意味論〜非接触（With コロナ）社会と手〜. 立教大学コミュニティ福祉学部紀要第 23 号